

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 山本英史

山本英史氏の論文『清代中国の地域支配』は、日本のみならず中国大陸、台湾、アメリカ合衆国など世界各地の図書館・文書館に所蔵されている稀覯の刊本や未公刊の文書を活用して、清朝の地方支配の実態を明らかにしようとした研究である。全体は大きく三篇に分かれる。第一篇「徴税機構の再編」では、明末清初における里甲制の解体の後、「税糧包攬」と呼ばれる請負慣行が展開し、事実上の新たな徴税機構として機能するようになった状況を、詳細に分析する。第二篇「清朝と在地権力」では、清代における郷紳や胥吏層など在地勢力の具体像を描写し、これら在地勢力に対する清朝地方政府の対処法において、取締りと妥協との両側面が複雑にからみあっていたことを実証する。第三篇「郷村管理と地方文献」では、地方志や地方政府文書など様々な地方史史料の特色に留意しつつ、地保・図頭など地方ごとに多様な名称をもつ郷村役の発生と展開の過程を分析する。一般に清朝統治の特色としてその集権的な性格が強調されることが多いが、本論文では、克明な実証研究を通して、清朝統治下の在地勢力の根強さ、及び清朝官僚と在地勢力との関係の複雑さが解明されている。

本論文の優れた点は、従来ほとんど用いられてこなかった新史料を多数発掘するとともに、既存の史料をも含めて、清代の地方社会関連史料の性格を総合的に問い直そうとしている点にある。むろん、従来の研究でも史料の性格については一定の注意が払われてきたが、本論文では一貫して、史料の背後にある史料作成者の「当為」の観念、及び「当為」と「実態」を矛盾なく結びつけようとする史料作成者の苦心、といった側面に慎重な分析が加えられている。本論文の扱う主な対象は賦役制度や地方統治制度であるが、史料作成者の意図や動機に留意する著者のこのような姿勢によって、これらの制度の展開が地方社会の政治対立や人間関係などの社会的文脈のなかで生き生きとした形で位置づけられることとなった。

各章の分析の深度にばらつきがある点、他の時期との比較の視点がやや不明瞭である点など、若干の問題点は残されるものの、本論文は、広範な史料調査に基づき、清代地方社会研究を一段と深化させた業績として評価できる。

以上より審査委員会は、本論文が博士（文学）にふさわしい研究であると判断する。